

4. 外国語学部

外国語学部は2008年に、神奈川大学全体の教育理念のもとに、「神奈川大学外国語学部規程」において「教育研究上の目的」を次のように定めている。「本学部は、国際都市横浜に立地する学部として、外国語の実践的な運用能力を高め、諸外国の社会及び歴史等、異文化についての理解を深めるとともに、異文化間の相互理解と文化交流を行える国際的な教養を身につけた人材の育成を目的とする」（第1条の2）。本学部はこのような教育研究上の目的を実現することを使命として、下記のように教育目標を立てる。

本学部が教育の柱として当初から重視してきたのは外国語教育であり、国際化の時代に対応した外国語の高度で実践的な運用能力の育成を教育目標の一つにする。その教育目標の実現のために、適正な規模で双方向的な少人数教育を行うことが必要であり、またネイティブ・スピーカーを活用することによって、高度なコミュニケーション能力を養うこととする。

また日本社会の国際化のなかで、諸外国の社会や歴史を深く理解し、新しい時代感覚を持った国際人を養成することが、もう一つの教育目標である。その教育目標の実現のために、外国語の運用能力に止まらず、外国語の文化的背景をなす当該国の社会や歴史についての深い理解が不可欠であり、海外留学や海外研修などを推進する。

さらに近年、社会全体のグローバル化が進行し文化が均質化するなかで、その自覚に裏付けられた異文化圏との文化交流を行える国際的な教養の形成もまた、教育目標の一つとなる。その教育目標の実現のためには、自らの文化的基盤である日本文化を改めて再認識するとともに、異文化の特性を十分に理解し、異文化間コミュニケーションを遂行する能力を育成することが重要である。

外国語学部の以上のような教育理念と教育目標について、新入生に対しては学科別ガイダンスを通して、また、在学生に対しては『履修要覧』などによって周知している。学内に止まらず学外についても、受験生や父母に対しては『キャンパスガイドブック』によって、そして社会に対しては神奈川大学ホームページの中の「外国語学部」サイト (<http://www.ffl.kanagawa-u.ac.jp>) によって、広く周知している。

外国語学部を構成する英語英文学科・スペイン語学科・中国語学科・国際文化交流学科の4学科は、外国語学部の「教育研究上の目的」を共通の理念として、それぞれの学科の教育目標を定めている。同じ外国語学部とは言え、4学科はそれぞれの独自性を有しており、したがって【現状説明】、【点検・評価】、【改善方策】について、学科ごとに個別に記述することとする。

英語英文学科

【現状説明】

英語は英語圏に暮らす多くの人びとにとっての母語であるのみならず、国際語として世界で広く運用されている。文化的背景を異にする人びとの地球規模の交わりに英語が広く運用されている現実を踏まえ、英語英文学科では次の2つの目標を掲げている。(1) 英語の運用能力を高め、英語が国際的な人と人との交わりに有益な言語であることを理解し、実践の場で使えるようにすること、(2) 英語圏の文学、文化、英語学への知識を深め、それらがより深い国際交流に重要であることを理解し、その促進に努めること、である。いふならば、英語英文学科の目指すところは、国際化時代を担うに足る英語の運用能力と、英語圏の文学、文化、英語学の知識とを兼ね備えた国際人の育成である。

このような学科の理念・教育目標については、さまざまな機会をとらえて周知に努めている。入学希望者に向けては、大学の開催するオープンキャンパスでの模擬授業、高校との連携事業（出張講義）などを積極的にとらえて、広報活動に努めている。大学のホーム

ページにおいても、学科の目的、カリキュラム、教員、各種行事等の紹介している。

学生に対する周知は、入学時のガイダンスや、学科の初年度教育の要とも言える「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」などの授業を通して行っている。学科のゼミ「基礎研究」の説明会及びそのパンフレット、履修要覧、シラバスなどによっても、周知に努めている。

【 点検・評価 】

人びとの交流がますます活発化し、世界のあらゆる場所で英語が使用されている今日、より高度な英語の運用能力をもち、国際的視野にたって活躍できる人材を育成することは社会の重要な責務の一つである。本学科の理念・目的は、その意味で、現実社会のニーズに対応し適切である。しかしながら、学生の習熟度や興味・関心の多様化が年々進んでいるなかで、この理念・目的を達成するための方法をより綿密に検討する必要がある。社会の人材養成に対する動きにも対応すべきだと考えている。

入学希望者や入学直後の学生には、本学科が、コミュニケーションの道具としてのみの英語を学ぶ場所ととらえている場合も多く、学科の目標・理念を周知については、より一層の努力が必要だと考えている。

【 改善方策 】

学科としての理念・目的は維持しつつ、その理念・目的を達する方法において、学生の習熟度や興味・関心が多様化しつつある現状を踏まえた対応を考えている。カリキュラムにおいて、社会の人材養成に対する具体的なニーズに即応するとともに、その運用方法によっても、習熟度や興味などをより考慮した授業実践など、効果的な英語力向上につながる方法を考えている。

また、学科の理念・目的の徹底は、教育実践の場においてばかりでなく、大学のホームページにおける学科欄をより充実させるなど、入学前の学生に向けた広報の場においても改善を図る。

スペイン語学科

【 現状説明 】

本学科は、教育目標を次のように定めている。「スペイン語はスペイン、ラテンアメリカ、アメリカ合衆国を中心に世界で5億人を超える人々が話すきわめて重要な国際語である。これを踏まえ、確かなスペイン語能力の修得を基礎として、スペイン語圏諸国の地域研究と、同時に副専攻コースとして設置した英語、ならびにその他の外国語教育にも力を注ぎ、幅広い教養をもつ国際人の養成を目指す」。この教育目標は、基本的にスペイン語学科において長年踏襲されてきたものであり、これが本学科の理念であり、目的である。したがって、現行のカリキュラムもそのような理念、目的に沿って編成されている。教員もその方向で学生を指導している。

【 点検・評価 】

特に重要なのは、近年、日本におけるラテンアメリカ諸国への関心が高まっていることと、アメリカ合衆国においていわゆるヒスパニック人口が急増していることである。これはアメリカ大陸全体を視野に入れたスペイン語教育の重要性が一層増していることを示している。したがって、今後も前述の教育目標を維持していきたい。

その意味では、2007年度からの英語コミュニケーション特修副専攻コースの設置は成功したと言える。2007年度中に副専攻コースの高校生向け広報活動に特に力を注いだ結果、2008年度には受験志願者数が回復し、副専攻コースも半数近くの学生が登録している。

一方、「スペインだけではない、5億人のスペイン語」という点に関しては、現在の高校教育においてはラテンアメリカ問題が扱われることが少ない。とくに本学に入学するレベルの高校生においては、「外国語と言えば英語である」と考える傾向があり、さらに、スペイン語が話されるのはスペインだけだと思っている高校生もある。

一般的に言えば高校生のラテンアメリカ諸国に対する関心の動向は日本とこれらの諸国との関係のあり方に左右される。この点ではこの4、5年来、ラテンアメリカ諸国の経済回復、日本におけるこの地域への関心の高まりを反映し、新入生にも意識変化が見られる。

この点については、本学科としても『キャンパスガイドブック』等の高校生向けメディアを通じてこの「5億人のスペイン語」をアピールし、国際社会におけるスペイン語の必要性を広く周知させるよう努力している。その一方で、入学後も初年次の授業からその意識を持たせるような工夫を行っている（たとえば、1年次からの入門ラテンアメリカ史科目の開講、文法用教材におけるアメリカ大陸関連事項の取り入れ、ラテンアメリカ諸国出身のネイティブ教員の採用等）。

近年、特に興味深いのは、サッカー熱との関係でスペイン語学科に入学してくる学生が目立つことである。これに対しては、サッカーがなぜ南米で盛んであるのか、逆に野球がカリブ海諸国でなぜ強いのかなどの問題を、この地域や文化、社会と関連づけながら、スペイン語や地域事情の学修に対する関心へと導いていくことが必要であり、実際、そのような方向で取り組んでいる。

スペインと南北アメリカを視野に入れた教育目標の実施に重点的に取り組んだのは2006年度の新カリキュラム導入からであるが、現在のところ成果は徐々に始めている。

【改善方策】

上記の点検・評価を踏まえ、今後も基本的には現在の方向で努力を続けていく。

中国語学科

【現状説明】

本学科は、「高度な中国語運用能力を身に付けるとともに、中国の社会・文化についても深く専門的に学び、修得したそれらの能力・知識によって、日中間の経済・文化交流の場で活躍し得る有為な人材を育成すること」を教育目標として、学生の教育に取り組んでいる。

2008年度で本学科は創設20年目を迎えた。この間の日中関係は、常に良好なものではなかったものの、その結びつきを強めてきた。こうした現下の状況では、(1)高度な中国語運用能力と(2)中国の社会・文化への専門的な知識、を獲得した人材が求められる。本学科の役割はそうした人材の育成と輩出の一端を担うことにあり、上記の教育目標はこの役割を果たすために設定されている。

この教育目標は本学科が年度初めに行う学年別ガイダンスで周知を図るのみならず、専任教員が日ごろの授業においても繰り返しその主旨を伝えるべく努力している。また、教育目標の学外への発信の一手段として、本学科主催の一日体験入学や毎年の卒論の抜粋を掲載した『中国語学科論集』の配付といった学科独自の取り組みを行っている。

【点検・評価】

本学科は、上に掲げた教育目標のもと、日中間の関係強化という大きなトレンドの中で、北京、上海、広州など中国の各都市で働く人材や日本国内で中国語を駆使して働く人材を輩出するなど着実に成果をあげてきた。つまりこれは教育目標の中にある「(1)高度な中国語運用能力と(2)中国の社会・文化への専門的な知識、を獲得した人材の育成」という

目的が適切なものであったことを意味している。

なお、本学科主催の一日体験入学や毎年の卒論の抜粋を掲載した、『中国語学科論集』の関係高校への配付といった学科独自の取り組みは受験生・入学者の確保に寄与した。

【改善方策】

上記の学科独自の方策をさらに推し進め、学科で取り組む教育・研究活動や各種イベントの詳細を紹介し、それを通じて関係高校の範囲を超えより広く社会に、本学科の教育目標を周知するための学科独自のホームページを立ち上げる。

国際文化交流学科

【現状説明】

本学科は、学生たちが将来日本文化を発信しながら異文化を背景にする人たちと共生・協働できる国際人に育つように、(1) 日本文化への広く深い知見、(2) 世界の文化的多様性への理解力、(3) 外国語によるコミュニケーション能力、を総合的に修得させることを目標としている。

本学科の理念・目的については、在学生には『履修要覧』や学科別ガイダンスにより周知している。受験生には、案内パンフレット『キャンパスガイドブック』や外国語学部ホームページによりアピールしている。ホームページは、さらに、本学科の理念・目的を広く社会に知らしめる役割も果たしている。

本学科は、上記目標の達成を目指したカリキュラムを用意して 2006 年度に出発した。カリキュラムの具体的な適切性については、検証の途上にある。

【点検・評価】

国際化が進展している現在、日本の内外で異文化を背景とする人たちと共生・協働できる能力は必須のものとなっている。それゆえ、本学科の教育理念は適切なものと言えるだろう。

また、そのような共生・協働のためには、相手方の文化への理解、交流の道具となる外国語能力、そして、みずからの依拠する日本文化への広く深い理解が欠かせない。それゆえ、本学科の教育目標は適切なものだと考えられる。

なお、異文化の理解、外国語によるコミュニケーション能力、の二つを教育目標に掲げる学科は他大学にも多いが、充実した日本文化研究を組み合わせる学科は多くない。これら三つを組み合わせているのが本学科の教育目標の特徴である。

本学科は、上記目標の達成を目指したカリキュラムを用意して出発し、完成への途上にある。カリキュラムの適切性については、学科完成年度以後の卒業生の状態によって判断されるべきものであろう。

【改善方策】

完成年度を迎えていないため、記載を差し控える。